

# 最低点からのスタート

藤沢 正男 (新21回生)

創立七〇周年おめでとうございます。

私の二人の兄も岩手中学に入学し、私も昭和三八年岩手中学に入学し、昭和四四年に岩手高校を卒業しました。中学に入学した時、父が喜んで一番高い学帽を買ってくれたことを覚えています。担任は中学時代は小笠原先生、高校時代は中館先生でした。六年間の学校生活で思ひ出はたくさんありますが、英語について書きたいと思います。中学入学後に第一回目のテストが六月にありました。テストの結果について英語の八重樫先生から、このクラス(五二名)の中に五〇点未満が一人いると発表があり、答案が返って来ました。私の点数は四七点で、「一人」は私以外に考えられません。忘れられないテストです。その後、西在家先生からは英語の添削、山中校長先生からは「英語の総合的研究」等々ご指導いただき好きな課目となりました。

現在損害保険会社に勤務しておりますが、高校卒業後一三年目に、会社派遣により、保険発祥の地ロンドンで研修することができました。ロンドンの最高級住宅街ハムステッドに住み、毎週末マルクスの墓までランニング、テニスウインブルドンのセンターコートでプレーを見物等々、英国文化の一端にふれることができました。良い物を長く使う、流行にあまり左右されない、マナー・名譽を貴ぶ「いぶし銀」のような英国人の性格を感じました。

生まれも育ちも旧都南村出身で、何のとりえもない田舎者が中学校で初めて英語に接し、その後英国滞在の経験が実現するとは全く考えていませんでした。また今年度損害保険会社各社が分担し、英語版の保険のテキスト(本)を作成中ですが、執筆者の一人として原稿を提出しました。社会人になってからも

英語に関連する仕事でできたのは、中学高校時代に諸先生の皆様から英語に対する興味を育てていただいた結果と感謝しております。

岩手高校の精神として、まっ先に思い出すのは、「質実剛健」です。中学時代の担任であった小笠原先生の道徳の授業内容が三〇年たった今でも思い出されます。改めて当時の教科書を読み返しますと、自戒の教訓であり、後の世代に伝えるべき貴重な財産である感じがいたします。

## 「自由と規律」

イギリスの学校生活 池田潔著

この国の三月といえは、まだ真冬だった。一日の課業が終り他の学生が寢室にゆくとき、外套の襟をたて空腹に震えながら、木枯の吹く中を自転車で二〇分はかかる郊外のお宅を訪ねる。LとRの区別、それにW音の矯正、湯殿から鏡を持ち出したり電燈の下に口を開かせてその太い指を突込んで舌を捻じ曲げたり、WOLF、WOLFと何十回か繰り返させ、気に入らないと椅子から立上って、そんな狼、何が恐いものかと、それは怒号に近かつ

た。よく新聞に広告の出ている『涙なしに語学の上達する方法』とか、『安楽椅子にもたれて覚えられる外国語の教授』そんなものが世の中にあると思ったら、とんでもない心得違いだぞ。……

昔、私の習ったフランス語の教師が、丁度

この通りだったんだ。怒鳴る。喚く。口を開ける。舌を引張る。初めは狂人かと思ったがその次には悪魔だと思った。こん度指を突込んだら噛み切つてやろう。何遍それを考えたか判らない。君だつてそう考えているさ。しかしフランスに戦争で出かけてみて、初めて

その悪魔のほんとうの親切が判ったんだ。誰が面白がつてそんな狂人じみた真似をするもんかって。さ、遅い、急いでお帰り。”

今後の更なる人材の育成をご期待申し上げます。